ミサゴ便り

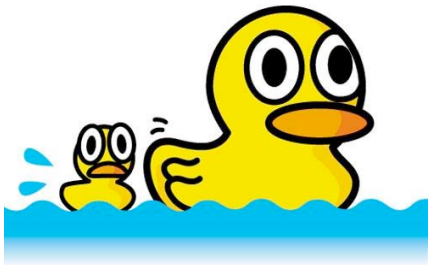
平成 14 年 10 月 15 日発行　　弓削野鳥の会編集発行

渡りの季節で賑わう三山

天高く、馬肥ゆる秋、まさに絶好のバードウォッチング日和の良い季節になりました。三山には渡り鳥をはじめ冬鳥も観察できるようになりました。冬鳥のヒタキ類、また夏鳥のオオルリが渡りの途中で骨休みといったところか、幼鳥、成鳥ともに顔を見せてくれました。眩しく輝く瑠璃色の背中、顎から胸にかけての黒、胸から下は白というツートンカラーの綺麗な姿にうっとりします。また、エゾビタキ、コサメビタキも沸き立つ虫をフライングキャッチしながら、輪を描いて枝から枝に飛び移っていました。今年はオオルリが度々観察されます。10 月下旬ぐらいまでは観察できるかもネ！

南　シ　ナ　海　の　宝　石（part２）　　松　本　敏　和

ホテルからクッションの悪いチャーターバスに揺られて赤茶けた粘土質の大地を切り裂き、ただ、アスファルトを敷き詰めただけの道路を行くこと約４５分、川幅 300ｍぐらいの河口近くのボート乗り場に着く。こんな所にも日本語の案内表示板があり驚かされる。客が８人乗れるボートに案内人と操舵係の２人を乗せていざ出発。案内人の指示通り川の水を舐めて塩分の濃さを確かめる。南シナ海が近く塩辛い。案内人はインドネシア語で説明をするが私には？？？である。干満時の潮位の差が２ｍ位あり、今は満潮の時間帯でマングローブの実、ポンポンの真っ赤なリンゴのような毒のある実などを見ながらボートは河の奥へと進む。上流へ進むにつれ川幅はどんどん狭くなり、対抗するボートと離合できなくなり、川幅の広いところまで行ったり来たりを繰り返しながら進む。周りの風景も同じように見えるし、頭上まで樹木が生い茂り太陽も見えないので、どちらから来たのわからなくなりそうだ。両手を広げると両方の木々に手が届くような川幅のところで再度水の塩分を確かめるが、河口付近とさほどかわらないような気がする。サルやヘビそしてお目当ての鳥をみながらといって



も、うっそうと生い茂る熱帯雨林のジャングルで捕食者を避けて生きるために、自然を上手く利用し、巧にカモフラージュした生き物の姿を見つけ出すことは大変難しく、手にした双眼鏡を構えることも出来ない。しかし、かなりの数の魅力的な動物が熱帯雨林の驚異的な数の植物に恵まれた環境を上手く利用して生きていることは、鳴き声やその気配から容易に推測できる。突然ボートが止まり、頭上を指差し何かを見ろというが、何がいるのか全然見えない。案内人の言うままに樹木の幹から枝先を目で追うと私の頭上に黒に黄色の縞模様のヘビがいて、もしも落ちてきたらと思うとぞっとする。黒に黄色の縞模様は日本では危険を知らせるため、バリケードなどによく使われ目立つ模様のように思うが、ジャングルの中で薄暗い樹木の影に隠れるとほとんどその姿は目立たないよく出来た自然の摂理に驚嘆させられる。ブラック・キャップ・キングフィッシャーというアオショウビンに似た鳥、ニタブァという背中がコバルトブルーのオオルリのような鳥やカワセミの一種のコモン・キングフィッシャーが河川を横切る姿が見られた。一通り案内も済み帰路に着く船上で枝

に止まるツバメ（私にはそう見えた）が一羽。日本にも越冬ツバメが居ても不思議はないと変な理屈に納得する。ジャングルを探検するには持てる感覚を総動員し鋭敏に研ぎ澄まさないと、森の生き物を見つけることは出来ない。もっと時間を掛けて熱帯雨林の森を自由に舞う蝶や虫たちを見つけたり、木から木へと飛び回るヒヨケザルを見たり、また、その繊細な翼に驚いたり、鳥たちの鮮やかな色彩に目を奪われたりしたいものだ。（to be continued）

弓　削　の　野　鳥　　平　山　和　昭

用あって弓削町誌（1986 年発行）を開いてみたとき、弓削の鳥獣類として野鳥の名が列記してあった。以前は気付かなかった項目である。当時の執筆者が見聞したものだとは思うが、三十一種の野鳥の名が列挙してある。ちなみに書き写してみると（原典は漢字、総ルビつき）雉・雉鳩・鳩・鶉（ウズラ）・雲雀・雀・目白・鶯・鵙（モズ）・鵯（ヒヨドリ）・四十雀・椋鳥・鶫(ツグミ)・頬白・鶺鴒（セキレイ）・千鳥・黄鶺（キビタキ）、鷦鷯（ミソサザイ）・翡翠（カワセミ）・葦切（ヨシキリ）・時鳥（ホトトギス）カイツブリ（これはヘキテイという漢字なのだがパソコンにない）・鵜(ウ)・烏・鳶・

鷹・白鷺・青鷺・鴎・鴨・木菟（ミミズク）・蝙蝠（コウモリ）。

　コウモリが最後に記されているのはご愛嬌だが、昨今の弓削野鳥の会のメンバーなら、これに倍する野鳥の名をあげることはたやすいことだろう。たとえば鳩だって、ドバト、アオバトがいる。又はオオルリ、コサメビタキ、サメビタキ、エゾビタキ、ルリビタキ、ジョウビタキ（これはヒンカチ）。鷹類では、ハヤブサとかサシバ、ハチクマ、ノスリ、ハイタカ、ミサゴ、オオタカ・・・といった具合にどんどん拡張できる。とはいえ一般的には、いまだに上記三十数種程度の野鳥と思われているのが現状かもしれない。それに十数年前には現実に

居なかったかもしれない。記録を残すことは、だから後世に親切な行為なんですね。先日、秋のオオルリに逢うために、早朝三山に登った。すでに先客がいてその方は散歩途次であったが「歩いていて気づいたのですが、弓削にこんなに色々な鳥が居るとは思いませんでした」とおっしゃっていた。そう、たしかに色々と居る。その色々と居ることを知ったのは、結局、バードウォッチングということを通じてだった。その意味で弓削野鳥の会の創設にかかわった、あるいはお世話してくださった方々には百万遍の感謝を申し上げたい。

さりながら、というか、こと此処にいたってみると、われわれは十数年前に比べて格段の、弓削の自然に関する（少なくとも野鳥の）知識を得たことを、せめて町内のみなさんともっと共有したいと思わざるを得ない。二年前、弓削町監修で「弓削・野鳥ガイドブック」が発行され、ハンディでビジュアルな成果が得られたのは素晴らしいことだ。しかし、成果を形にするということは「始まり」だと意

識しないと、その後の発展は期待できない。このガイドブックをたたき台にして、われわれ野鳥の会のメンバーは、個々にその内容の充実に向かって楽しみつつ、そう、まさに野鳥に関する見聞を広めていかねばならないのではなかろうか。機会を待って野鳥マップも作りたい。いつどこへ行けばどの鳥に逢えるかなど、実用的知識も蓄積したい。そしてなによりもまず、せめて在島の野鳥に関しては、微に入り細に至るまでの知識を持ちたい。そう考えると、さえずり一つとってみても決定的に断言できるほど自信がもてない鳥の方がまだ多いことに愕然とする。何か昔「積み立ては日掛け月掛け心がけ」な～んて標語がありましたが、鳥見も要するに「心がけ」・・ですなあ。

・若鳥をつれてぞ三山に憩ふ日はオオルリの背に朝日輝へ

・ 美しき囀りいまだし聞かねどもその瑠璃の背に逢う眼福の刻

・ 白雪のごとき胸張り瑠璃色の羽根ひけらかし飛び交ふオオルリ

探　鳥　例　会　情　報　　弓削野鳥の会

☆ ６月２日　松原・日比方面

参加者：松本敏和、松本純一、松本祐子、坂本洋子、白玉明子、森岡良子、角濱光一、平山和昭、山田次郎、山下みさよ、菅谷葉子、上森エミコ、青木英和、田窪宏行、村上尚

※　観察した鳥：アオバズク、メジロ、カワラヒワ、ウグイス、アオサギ等

☆７月２８日　佐島・竹の浦池

参加者：松本敏和、松本純一、松本祐子、坂本洋子、白玉明子、角濱光一、上森エミコ、山田次郎、村上尚

※　観察した鳥：コサギ、ダイサギ、アオサギ、ゴイサギ、イソヒヨドリ、カワラヒワ、ムクドリ等

☆８月２５日　佐島・三つ小島、竹の浦池

参加者：白玉明子、上森エミコ、山田次郎、村上尚

※　観察した鳥：コサギ、ダイサギ、アオサギ、ゴイサギ、イソヒヨドリ、カワラヒワ、ムクドリ等

☆９月２９日　三山周辺

参加者：松本敏和、松本純一、松本祐子、白玉明子、上森エミコ、平山和昭(妻)、山田次郎、村上尚

□　観察した鳥：コサメビタキ、エゾビタキ、オオルリ、ヒヨドリ、セグロセキレイ、トビ、ミサゴ、メジロ、ホウジロ等

今後の探鳥会の予定

・10 月 27 日　冬鳥の観察　　三山周辺
・11 月 17 日　冬鳥の観察　　久司山周辺
・12 月 15 日　猛禽類の識別　狩尾・大谷方面
・ 1 月 26 日　町外遠征　　松永湾
・ 2 月 16 日　春を探そう　　佐島
・ 3 月 16 日　冬鳥の観察　　三山周辺

※　総会で説明したとおり、探鳥会の日程については計画通り開催いたしますので、通知等はいたしません。予定日の午前９：００に公民館に集合ください。なお、10 月は祭りのため日程を変更していますのでご了承下さい。